

Title	2014年度藝文学会シンポジウム「タカラヅカ100年!」：はじめに
Sub Title	Symposium : 100 years of the Takarazuka Revue! : introduction
Author	常山, 菜穂子(Tsuneyama, Nahoko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2015
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.108, (2015. 6) ,p.135 (106)- 138 (103)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2014年度藝文学会シンポジウム「タカラヅカ100年!」 開催日: 2014年12月12日 (金) 場所: 慶應義塾大学三田キャンパス北館ホール
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01080001-0135">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01080001-0135</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

2014 年度藝文学会シンポジウム  
「タカラヅカ100年!」



日： 2014 年 12 月 12 日（金）  
時間： 午後 3 時～ 5 時 30 分  
場所： 三田キャンパス北館ホール  
講師： 小林公一（宝塚歌劇団理事長）  
鈴木国男（共立女子大学文学部教授）  
中本千晶（フリージャーナリスト）  
司会： 常山菜穂子（慶應義塾大学法学部教授）

## はじめに

### 常山菜穂子

本日は師走のお忙しい中を、慶應義塾大学藝文学会シンポジウム「タカラヅカ100年！」にお集まり頂き、誠に有り難うございます。私は本日の司会を務めさせて頂きます、法学部の常山菜穂子と申します。アメリカ演劇と演劇論を専門としておりまして、また25年来、細々とではありますが、宝塚歌劇を応援し続けているということで、このシンポジウムの企画・運営を行うこととなりました。どうぞよろしくお願い致します。

まずは本日のシンポジウムについて、趣旨をご案内致します。

本日のテーマである宝塚歌劇団は1914年、兵庫県宝塚市で生まれ、今年2014年に創立100周年を迎えました。現在の阪急阪神東宝グループ創設者・小林一三(1873-1957)によって、電鉄網に沿った住宅地開発と、それに伴う文化圏形成を目指す事業の一環として創られ、こんにちまで宝塚市に本拠を置いています。人々が親しみを込めて「ムラ」とよぶ小さな町には歌劇を中心に演劇文化と経済構造が形成され、スターとファンの強い共同体意識が育まれています。それと同時に、こうした地域に密着した連帯は歌劇団が外部へと進出する際の基盤と原動力になってきました。宝塚は100年にわたって東京へ、日本全国へ、そして海外へと積極的に文化を発信し続け、いまや日本演劇史に確固たる地位を築くに至っています。1938年のドイツ・イタリア訪問から始まる海外公演の歴史は古く、さらに今後はとりわけアジア市場の開拓に力を入れていく壮大な計画があるといます。現に1990年代後半以降は香港、中国、韓国、台湾への公演を成功させ、2015年夏にも第二回台湾公演を行い、名作『ベルサイユのばら』を上演することがすでに発表されています。「ムラ」から始まった歌劇団の演劇文化

がいかに伝統を大切にしつつ、今後の海外市場を見据えて変貌しようとしているのか。本日は、創立からこんにちまでの100年を総括すると共に、未来への課題を考え、次なる100年へとつながる展望を明らかにしたいと思っております。

皆様もご存じのとおり、宝塚は女性だけの役者によって演じられる、類まれな劇団であり、近年ではパフォーマンスとしてはもちろんのこと、学術研究の対象としても国内外から大いに注目されています。たとえば、本日の講師陣が所属する日本演劇学会では2002年と、そして去年2013年に、宝塚歌劇を様々な角度から研究・分析する全国大会を開催しました。この藝文学会のシンポジウムでは、過去に演劇の分野では、2010年に現代演劇の最先端をゆく二つの劇団「燐光群」と「チェルフィッチュ」の代表をお招きして、日本演劇について語って頂く企画を行いました。今年、創立100周年という記念の年をきっかけに、宝塚歌劇という演劇芸術について、今一度考えることができればと願っております。

もう一点、慶應義塾大学藝文学会で宝塚歌劇を語ることの意義のようなものについてです。演劇というと、どうしても慶應より早稲田の方が関係があるように感じがちなのですが、宝塚歌劇団を作った小林一三は1888年、15歳で慶應義塾に入学し、福澤諭吉から直接の薫陶を受けています。のちに小林はこんにちの阪急阪神東宝グループを築き上げるわけですが、独立独歩や反権力の精神を受け継いだともいえます。また、現在、宝塚歌劇団の演出家にはミュージカルで有名な小池修一郎さんや若手の小柳奈穂子さんといった慶應大学出身の演出家がいて作品を発表していますし、実際の舞台に立つ歌劇団の団員にも慶應義塾女子高校出身のスターが過去にも現役にもたくさんいます。そう考えますと、思いの外、慶應義塾と宝塚歌劇の関係というのは長く深く、本日、藝文学会のテーマとして取り上げるのも自然のことだったと言えるかもしれません。

前置きはこれくらいとしまして、これからのプログラムと講師の先生方をご紹介致します。まずは、歌劇団よりご提供頂きました、宝塚の紹介映像を10分ほど流します。何となくは知っているけれど実際の舞台は観たことない方や、ペルバラしか知らないという方も多いかと思しますので、歌劇団の歴史や舞台を実際の映像でご覧下さい。

その後、最初の講師、共立女子大学教授・鈴木国男先生に30分お話し頂きます。鈴木先生はイタリア政府給費留学生としてローマ大学演劇研究所に学ばれ、

18世紀イタリア演劇とオペラを専門としていらっしゃいます。と同時に、宝塚歌劇についても演劇学の視点から精力的にご研究なさっていて、宝塚研究の第一人者でいらっしゃいます。本日は「男役アイデア」というタイトルで、「宝塚の男役は理想の男性像である」という通説を問い直し、プラトンの「理想」論から「男役」とは何かを考察します。

続いて、二人目の講師、フリージャーナリストの中本千晶先生に30分お話し頂きます。中本先生は東京大学法学部卒業後、株式会社リクルートにご勤務のうちジャーナリストとして独立なさいました。現在、早稲田大学講師をお勤めの一方、宝塚について『宝塚読本』（文春文庫）、『なぜ宝塚歌劇に客は押し寄せるのか』（小学館新書）、『タカラヅカ流世界史』『タカラヅカ100年100問100答』（東京堂出版）といった本を次々とご発表なさっています。この11月にお出しになったばかりの最新刊『タカラヅカ流日本史』では、宝塚の名場面をつなぎながら新しい歴史観を展開していらっしゃいます。本日は、「101年目以降を考えるための7つの質問～今、ファンはこう感じている～」というタイトルで、ネット上で実際に行ったアンケート結果を踏まえて、宝塚のこれからを論じます。

二人の先生のあとは、インタビュー形式で、宝塚歌劇団現理事長の小林公一氏に約60分、お話を伺います。小林さんは1982年に慶應義塾大学法学部法律学科を卒業し阪急電鉄に入社、阪急阪神ホールディングス取締役を務められ、現在は阪急電鉄取締役でいらっしゃいます。1989年から宝塚歌劇団星組のプロデューサー、1996年に歌劇団理事、2004年から歌劇団理事長に就任なさっています。本日は、公開インタビューを行うにあたり、あらかじめいくつかの質問を提示しておりますので、それにお答え頂きながら、鈴木先生、中本先生を交えて、宝塚の伝統と未来について話し合えたらと思っております。